我が班の安全活動

雫石営林署　○御所森林官　森 川 秀 和
造 林 係 長　羽 柴 武 志

1. はじめに

我が班では、日頃から班員一丸となり安全活動に取り組んできたところであるが、残念ながら今年度事業開始早々、地拵鎌を研磨中に指を切創するという災害が発生した。このことについて類似災害を防ぐための対策を、全員で考え実行してきた結果を発表する。

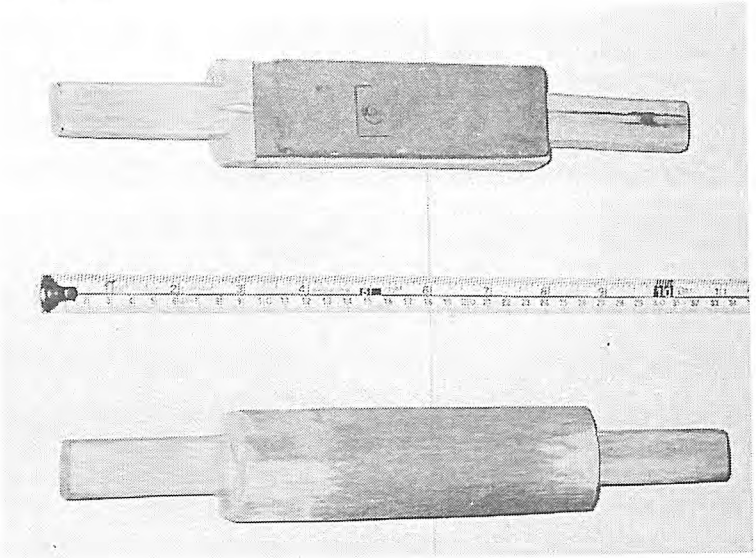
また従来より使用してきた携帯薬品袋は、ハチノックの出し入れがしにくく、蜂の突然の飛来に対して素早く対応出来ないという問題点があり、この携帯薬品袋の改良にも取り組んできたので、この取り組みについても合わせて発表する。

2. 砥石ホルダー誕生までの経緯

被災者は、地拵鎌の刃がこぼれたので研ぎ台に鎌を安定させ、研磨していたところ手が滑り左手第四指が刃部に触れ受災した。この災害について、発生原因・問題点及び今後の対策について班員全員で話し合った。

その結果、原因・問題点として砥石が小さくなっていたため、力の加減で鎌からはずれやすく安全上問題があるとの指摘があった。このことをふまえ、今後の対策については、欠けたり、すり減って小さくなった砥石等、安全上問題があると思われる物については一切使用しないこととした。また、より安全性を高めるため、手を保護するためのホルダーを砥石に付けてみてはどうかと言う話が出た。

ホルダーの材料は「資源の有効活用」という観点から、保育間伐で伐採した間伐木を利用することとした。直径6～8㎝位の木を、長さ30㎝位に切り、さらに縦方向に二つ割りにし、これを砥石に合わせて加工し強力接着剤で接着した。両端には研磨中に万一砥石が刃部からはずれても、手が刃に触れないように「ストッパー」を取り付けた。



（写真－1　ホルダー付砥石）

3. 携帯薬品袋について

当署では、ここ数年毎年のように蜂による災害が発生している。このようなことから、今年度は「女王蜂捕獲作戦」と銘打って、五月初めに誘引捕殺剤を設置し、女王蜂の捕獲に取り組んだ。そのためか、各作業地とも蜂の数が例年よりかなり減少したと思われる。

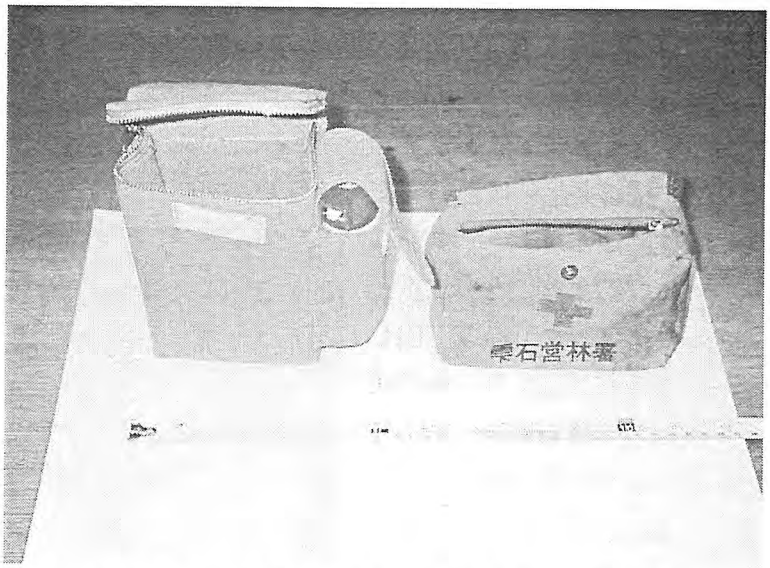
また、蜂の突然の飛来に対応するため「ハチノック」は常に携帯するとともに、万一刺された場合や他の怪我に対応するための薬品類を持ち歩くため市販の薬品袋に入れて常に携行している。

この携帯薬品袋の改良に至った経緯について発表する。

従来型の携帯薬品袋には、「ハチノック」と他の薬品を一緒に入れて携行していた。このため、物の出し入れが不便であり、特に出し入れ口がファスナーであるため、蜂の突然の飛来に「ハチノック」で素早く対応することが困難であると、現場の安全懇談会等の場で話題に上げられた。

これについて、問題点を整理し、その解決策を考えた。

まず、従来型の携帯薬品袋の寸法が15㎝×10㎝×6㎝で、「ハチノック」と他の薬品を一緒に収納するには小さすぎるサイズである。そのため「ハチノック」を収納するスペースを別に設けることにした。また、蜂の突然の飛来に対応できるよう「ハチノック」は、従来横置きだったものを縦置きにし、さらに取り出し口はファスナーからマジックテープを利用しワンタッチ式に改良することにした。



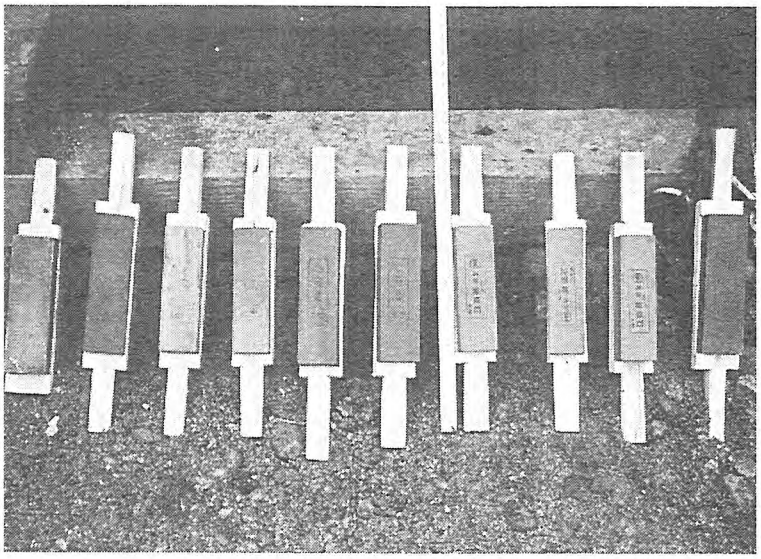
（写真－2　薬品袋　左　改良型　右　従来型）

4. 結果

(1) 砥石ホルダーについて

当初考えたホルダーは、ストッパーを片方にだけ取り付けた、しかしこれでは一方向からだけの使用になるため、砥石の片方だけがすり減ってしまうという欠点がある。そこで両方向から使用できるように、両端に「ストッパー」を取り付けることにした。このことにより、砥石の片方だけがすり減るという問題点は解消された。

砥石を普通の状態で使用していくと、ある程度の薄さになると手に持って使用を続けるのが困難になる。



（写真－3　左端　片側ストッパー付）

（写真－4　ホルダー付砥石の使用状況）

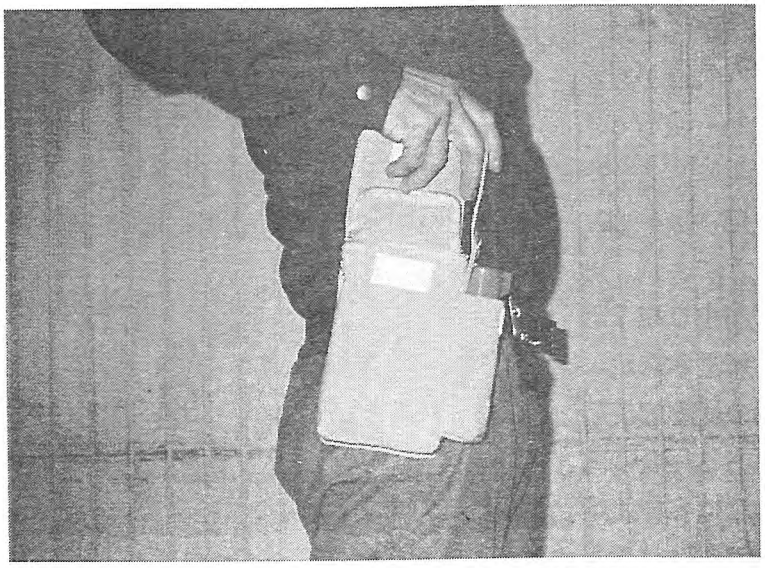
それを無理に使用し続けることは災害を引き起こす一因にもなりかねない。しかし、ホルダーを取り付けることにより今までよりも薄くなるまで使用を続けることが出来る。これは、ホルダーを取り付けることにより安全性が高まるのはもちろんであるが、砥石を無駄なく使用することが出来る。ので経済性にも優れている

(2)　携帯薬品袋について

薬品類とハチノックを別々に収納することにより、「ハチノック」の取り出しがスムースになり、蜂の突然の飛来にも素早く対応できるようになった。

また、「ハチノック」の収納スペースを薬品袋の脇に設けたことにより、今までよりも多くの薬品類を携行することが可能となり、万一の事に対しての体制が強化された。

（写真－5　薬品袋装着状況　左　改良型　右　従来型）



（写真－6　改良型薬品袋装着状況）

6. おわりに

類似災害を起こさないという観点から、今回の研究を進めてきたが、まだまだ改良の余地はあると思っており、今後も試行錯誤しながら安全に関しては努力していきたいと思っている。また、この研究を通じて、班員一人ひとりの安全に対しての意識の高揚が図られたものと思っている。

最後に、安全に関しては時間を惜しまず、皆で納得がいくまで話し合い、その話し合いの結果を十分に生かして職場から災害を一掃し、明るく楽しい職場づくりを目指して今後も頑張っていきたいと思っている。